

老川慶喜先生の人と学問

— インタビュー —

渡 邊 恵 一

はじめに

2015年3月末、老川慶喜先生は満65歳の誕生日を迎えるとともに、立教大学経済学部における24年間の教員生活を終えられた。ご退職に先立って先生は、「思い出すままに 私の研究遍歴」(老川 2015)という回顧録を執筆されており、その中でご自身の経歴を振り返られるとともに、多岐にわたる研究の歩みなどについても分野ごとに手際よく整理されている。

このように、先生ご自身の手による「人と学問」がすでに発表されている以上、外部の者が付け加えるようなことは、もはや何も無いのかもしれない。しかし、ご自分で書かれる回顧録であるゆえに、気恥ずかしさなどから遠慮されたようなことや、執筆後に思い起こされていることもあるのではないと思われる。筆者は、立教大学大学院の逆井ゼミにおける15期離れた弟弟子にあたり、経済学部助手を経て他大学に職を得たのちも先生とは長いお付き合いが続いているが、そのような者にとっては何度も耳にしているような面白い、ときに滋味のある逸話も実のところ広くは知られていないし、回顧録に書かれていることを素材に、もう少し立ち入っておうかがいしてみたいようなこともある。

ここでは、以上のような思いから2015年の晩秋に筆者が行ったやや長めのインタビューの内容を再構成し、あらためて老川先生の「人と学問」への接近を試みることにしたい。対話形式の文章としたのは、先生からお聞きしたせつかくのお話を伝聞調の表現にしたくなかったからである。やや異例の形式ではあるが、どうかご諒承を願いたい。

1. 大学に入るまで (1950.3~1968.3)

— まず、回顧録ではあまり触れられていない先生の生い立ちについて、少しばかりおうかがいしたいと思います。先生は1950年3月29日、埼玉県川口市で男だけの6人兄弟の末っ子として生まれました。川口といえば鋳物の街というイメージがありますが、ご生家の周辺はどのようなところでしたか。

老川 僕が育ったところは芝^{しば}といいまして、「鋳物の街」ではなくてむしろ「織物の村」なん

です。浦和に近い方ですね。近所には染物工場などがあって、機織りを昔やっていたという家もずいぶんありました。鉄道との関係でいうと、日本車輛の工場¹⁾があったところです。鋳物とは全然関係ない地域ですね。地元の川口市立芝小学校、芝中学校に通いました。

—先生は軟式テニスをされていたそうですが、いつごろから始めたのですか。

老川 川口は軟式テニスが割合盛んなところで、中学校1年から始めました。新人戦から3年生の夏の大会が終わるまで、市内の大会は全部優勝しました。それで、地元ではテニスで一躍有名になったのです。3年生の6月にあった県大会でも準優勝しました。

そのころ、僕が高校3年になるときに埼玉国体が開かれることが決まり、川口からも国体選手を出したいということになりました。うちの父はスチール・サッシを製造する中小企業を経営していて、自民党川口支部の支部長もやっていたから、市議員とかもしょっちゅう家に遊びに来ていました。そのうち、市長とか軟式テニス連盟の会長とかそういう人たちがやって来て、ぜひ川口の高校に入学させてくれという話になりました。

テニスは好きだから一生懸命やっていたけど、勉強もそこそこやっていたので、浦高（埼玉県立浦和高校）とはいかないまでもそれなりの進学校へ進んで、大学にも行きたいと思っていました。それでお断りするんですが、何度も何度もお願いに来て……（笑）。今から考えるときわめてバカな選択をしたと思うのだけれど、こういう場合、普通はスポーツか何かで自分の学力より高い学校に行くわけでしょう。僕の場合は逆だったんです（笑）。

こう見えても小学校のころは体が弱く、2年生のときに大きな病気をして、5年生くらいまでは脚から腰まであるようなギブスをはめて足を引きずって歩いていました。そんな経験があったので、スポーツができることも嬉しかったし、人からそういうことをいわれると、僕の悪い性格なんだけどついその気になってしまって（笑）、それならということで市立川口高等学校に行くことにしました。当時この学校は商業高校で、大学に進学するには不利になるからダメだって言ったら、こんど普通科ができるから大丈夫だというようなことも言われたり、あの手この手で口説かれましたね（笑）。だから、僕は普通科の第1期生です。

でも、結局テニスは1年生でやめました。そこそこの戦績はあったんですけども、自分自身でテニスにちょっと限界を感じたというのもあって。

それと、運動ばかりやっているとロクな人間にはなれないと思うようになりました。何ていうか、とめどなく運動ばかりやるんですよ（笑）。放課後から夜の8時、9時まで。とても勉強なんかしている時間がない。埼玉国体の候補選手ということであちこちの強化合宿なんか引っぱり回され、勉強と両立するのがもう無理だと自分で悟ってテニスはやめました。この経験が、僕のスポーツに対する認識のひとつの基盤になりました。たとえば、立教大学がスポーツをそんなに一生懸命やって、いったい何になるんだとかね（笑）。

1) 日本車輛蕨工場（蕨製作所）。1972年3月に閉鎖され、跡地は日本住宅公団（現・都市再生機構）の川口芝園団地となった。

ただ、自分の意に反した高校へ行ったけれど、学校の中では成績がまあ優秀だったので母校として教員にも採用してくれたし、その後もいろいろと便宜を図ってもらえました。そこから学んだことは、人生何が幸いするかはわからないなっていうことですね。

—進学先として、立教大学経済学部を選んだ理由はありますか。本当は文学部で日本史を勉強したかったそうですね (老川 2015, 2頁)。

老川 高校のときにすごく影響を受けた先生で、堀井保信^{ほりい やすのぶ}という英語の先生が立教大学を勧めてくれました。滋賀県の高校から転任してきて、「お前たちが英語を勉強するのはまだ何年も早い！」なんてことを言う方でした。まず、日本語をちゃんと読めるようになれということで、あの本読め、この本読めといったは、小説からマルクスやエンゲルスの著作までいろいろ紹介してくれました。半分バカにするように、反感を買うような言い方をするんですけどね (笑)。

だから、『空想から科学へ』とか、『共産党宣言』だとか、『賃金・価格・利潤』なんて、ろくに理解もできなかったけれども、高校時代に一応読んでいますよ。ジョージ・オーウェルの『アニマル・ファーム (動物農場)』も英語で読みました。堀井先生がいたから、高校らしい雰囲気は少しはあったかなという感じです。その先生が、「立教はいいよ」って言うんですよね。知り合いの卒業生がいい人ばかりだったらいいです。

家のほうから言われていたのは、日本史ではダメだということです。要するにサラリーマンになるのだから、経済とか法律ならともかく、歴史なんかやっていて何になるんだと (笑)。まあ、そんなものかなと思って経済学部になりました。

2. 学部学生のころ (1968.4~1972.3)

—1968年4月、立教大学経済学部経済学科に入学します。この年は東京大学や日本大学で紛争が起きますが、先生が1年生のころの立教大学は、まだ比較的平穏を保っていたようですね。ところが、入学2年目の春から文学部仏文科の教員人事問題を発端に立教でも大学紛争が発生し、夏休み前からいわゆる「大学立法」反対を掲げた全学ストライキに突入します。ストは12月になってようやく解除されるのですが、先生ご自身はこのような「闘争」にどう向き合っていたのでしょうか。

老川 当時立教大学の学生自治会は、いわゆる民青 (日本民主青年同盟) 系が牛耳っていたんだけど、全共闘 (全学共闘会議) 系が力を持ち始めて、ついには自治会をも奪うことになったのです。たしか6月ごろで、シトシト雨が降る中、民青の自治会が部屋を明け渡した場面を覚えてます。

僕は社会福祉研究会というサークルに入っていて……といっても、年間の研究テーマでは基地問題とか、過疎問題などを取り上げていました。これも社会福祉だとか、拡大解釈してね (笑)。思想が一本にまとまっているところではなく、全共闘系やら民青やら市民派っていうか、

ベ平連（ベトナムに平和を！市民文化団体連合）なんかにかかわるような、いろんな考えの人たちがいました。そこでいろいろと議論もして、やっぱり民青の自治会ではダメだということになって、このときはまあ全共闘を支持する側の一人ではあったのです。

ところが、その後もストライキがずっと続いていくわけですよ。そうなってくると、一般学生としては、やっぱり何とかこのストライキを止めなければまずいよということになってくる。学生大会でストに入ることを決めたのだから、それを解除するためにはもう一回学生大会を開かなくてはいけない。僕の属していた社会福祉研究会やその他、昔の「山小屋」に集まっていた文化系サークルの中からそういう議論が出てきて、それでタッカーホールで学生大会をやることになったのです。当然、全共闘系の自治会は学生大会の開催を妨害しにやってきて、12月の寒い日だったんだけど、消火栓のホースで全共闘の学生に放水して追っ払ったりして（笑）。それで、学生大会でスト解除が決議され、何とかもとへ戻ったという感じになりました。

——そのあたりの雰囲気は私たちの世代だとなかなかよくわからないのですが、授業がほとんど開かれなかったということは、単位認定のための試験だけが行われたということですか。老川 当時はまだ年に1回だけの試験ですから、12月にストライキが解除された後、朝から晩まで一日中、集中的に時間割が組まれて授業が行われたんです。3月ぎりぎりくらいまでやっていたのかな。それで試験とかレポートで成績をつけて、進級とか卒業には支障がないようになっていました。そんなふうに集中授業になって……もちろん出ていませんけど（笑）。

——そのようなご経験も経て、遅ればせながら3年生からゼミに入ったということですが、選ばれたのは西洋経済史の近藤晃先生²⁾のゼミでした。

老川 のちに婦人画報社という出版社に勤める岡本君という友達の紹介でね。なぜ親しくなったかという、名前が「オイカワ」、「オカモト」で、席順が僕の後ろだったんです。

——近藤ゼミでは、大塚久雄の『近代欧州経済史序説』とか、全5巻からなる『西洋経済史講座』所収の論文などを読まれたそうですが（老川 2015, 2頁）、単行本である前者はともかく、後者はどうされたのですか。当時はコピーなんかはまだ……。

老川 いやいや、そうではなくて本を買うんです。

——ゼミ生一人ひとりが5巻本の『講座』を買ったのですか！

老川 みんな買いましたよ（笑）。5冊いっぺんに買ったんじゃないと思うけど。

——計算してみますと、そのころの近藤先生は42歳。私は晩年の近藤先生しか知らないのですが、どんなゼミでしたか。

老川 当時のゼミっていうのは先生をあまり当てにしていなかったんで、ゼミの時間になるとゼミ長を中心に集まってもう始めるんですね。先生が来なくても（笑）。そのあと先生がやってきて、そこでの議論に口をはさんできて、どうのこうの説明してくれるという感じです。

2) 近藤晃 (1928-2008)。立教大学経済学部教授。専門はイギリス経済史。著書に『市場経済の史的構造 イギリス市場史研究序説』（未来社、1995年）など。

—それなら、先生は楽ですね（笑）。

老川 そんなのを見ていたから、大学の教員って楽なんだなと思っていました（笑）。でも、近藤先生は学生の面倒見はとてよかったです。お酒を飲みに行ったり、正月には大泉学園のご自宅に呼ばれたりしていました。大学院に進むときにも相談に乗っていただいたし、結婚するときには仲人をお願いしました。

—一般教養科目の林英夫先生³⁾の講義に感銘を受けたそうですが（老川 2015, 1 頁）、学部
の専門科目で印象に残るような講義はありましたか。

老川 1年生の必修科目で経済学概論というのがあったんですが、担当されていたのが井上周八先生⁴⁾でした。講義を聴いているとき、さっき話した『賃金・価格・利潤』とか『賃労働と資本』という本が出てきて、「あ、これ読んだことがある！」と思ったりしました。井上先生の話も面白かったです。のちにああいうふうになられて、非常に残念ですね。あの講義を聴いて『資本論』もちゃんと読まなきゃと思って、1年生の夏に第1巻を読んだのかな。

—先生にいわゆる趣味のようなものがないことはよく知っていますが（笑）、学生時代、フ
リータイムの過ごし方などはどうされていきましたか。

老川 旅行はよくしましたね。基本的にはリュックサック背負っての一人旅です。夜行の急行
列車に乗って、周遊券とかで北陸のほうも行ったし、東北、高山なんかにも行きました。

—4年生の就職活動では、政府系金融機関に最終面接まで残ったとのことですが。

老川 海外経済協力基金⁵⁾というところで、発展途上国の問題に関心を持っていたものですか
ら、そこだけ受けたのです。そのあとの教員採用試験は「日本史」で受けたんですけど、それが間違いで、近代史はともかく古代史や中世史の史料なんかが出てきてちっともわからない
（笑）。見事に落っこちました。

それで、回顧録にも書いたんだけど、たまたま親が買った15万円ほどの学債に利子がついて
戻ってくることになり、その15万円をもらって大学院に進むことができました。当時の大学院
授業料が、ちょうど15万円くらいでした。研究者になるつもりはなかったのですが、高校の教
員になるなら日本史をもう少し勉強してみようと思っていました。

3. 大学院修士課程のころ（1972.4～1974.3）

—そのようなこともあって、大学院では日本経済史を専攻されます。近藤先生ともご相談さ

3) 林英夫 (1920-2007)。立教大学文学部教授、東京家政大学文学部教授。専門は日本史。著書に『近世農村工業史の基礎過程』（青木書店、1960年）など。

4) 井上周八 (1925-2014)。立教大学経済学部教授。専門は経済理論、農業経済学。著書に『地代の理論』（理論社、1963年）、『農業経済学の基礎理論』（東明社、1968年）など。

5) 1961年3月に発足した発展途上国の開発事業への投資や融資を行う政府系金融機関。略称 OECF。

れて、逆井^{さかさい}孝仁先生⁶⁾のご指導を受けることになりました。逆井先生の講義は、学部時代にも聴いていたのですか。

老川 聴きましたが、タッカーホールでやっていて、何かもう演説調で…… (笑)。でも、話は上手かったというか、それなりに面白くは聴きました。

大学院の授業はひどかったですよ (笑)。3号館にあった学部長室の隣が逆井研究室だったんだけど、10時40分から授業が始まるのに、来るのは早くて11時半。通常は12時ぐらいで、それから昼休みになんか会議があるって言いだしたりして (笑)。

—私のころになっても、あまり変わりませんでしたね (笑)。一応聞いておきますが、たとえば論文の書き方などのご指導は……。

老川 なんにも教わってないね (笑)。ただ、鉄道史をやったらどうかと勧めてくれたのは逆井先生で、田口鼎軒 (卯吉) の鉄道論の分析がなされている内田義彦の論文 (内田 1960) を読みなさいと言ってくれました。こちらも別に何をやりたいていう当てがあったわけじゃないので、素直に読んでいきながら、だんだんはまっていったという感じです。

—鉄道というのは、逆井先生のご専門 (近世経済思想史) からすれば少し意外なアドバイスのようにも思えますね。そうすると、鉄道史研究への道を導かれたのは逆井先生ということになるのでしょうか。

老川 ええ。でも、内田論文には鉄道というよりも局地的市場圏のことが書かれているので、そういうところに逆井先生が注目されたというのはわかります。

—回顧録では、修士課程進学とともに逆井先生に勧められて法政大学大学院の山本弘文先生⁷⁾のゼミに、2年生からは近藤先生のご紹介で野田正穂先生⁸⁾のゼミにそれぞれ参加するようになったと書かれていますが (老川 2015, 3 ~ 4 頁)、以前、老川先生が書かれた両先生への追悼文によれば、山本ゼミへの参加が修士課程2年生、野田ゼミへは博士課程進学後となっています (老川 2013b, 1 頁, 老川 2008a, 1 頁)。細かいことですが、どちらが正しいのでしょうか。

ついでに申し上げますと、これらの追悼文および『明治期地方鉄道史研究』の序文で老川先生は、立教大学大学院と法政大学大学院との単位互換制度にもとづいて山本先生および野田先生の指導を受けることになったとも書かれているのですが (老川 1983, iii 頁)、念のため『立教大学経済学部100年史』で確認してみたところ、法政大学大学院社会科学部研究科との間で単

1999年10月、日本輸出入銀行と合併し、国際協力銀行 (JBIC) となった。

6) 逆井孝仁 (1926 2013)。同志社大学経済学部助教授を経て立教大学経済学部教授。専門は日本経済思想史。著書に『日本資本主義 展開と論理』(共編著、東京大学出版会、1978年) など。

7) 山本弘文 (1923 2012) 法政大学経済学部教授。専門は日本経済史。著書に『維新期の街道と輸送』(法政大学出版局、1972年) など。

8) 野田正穂 (1928 2008) 法政大学経営学部教授。専門は金融論、証券市場論。著書に『日本証券市場成立史 明治期の鉄道と株式会社金融』(有斐閣、1980年) など。

位互換に向けての協議が開始されたのが1973年5月、単位互換制度が発足したのは翌74年4月となっていました（立教大学経済学部編纂委員会編 2008, 166～167頁）。法政の大学院へ向うくのが単位互換制度と関連するならば、山本先生や野田先生のゼミへの参加は、もしかすると博士課程へ進学された1974年度以降のことではないでしょうか。

老川 そうか、ドクターに入ってからだったのかな……。『経済学部100年史』のその部分も実は僕が書いたので（笑）、渡邊君の言う通りだと思います。野田先生のところには1～2年遅れて行ったと覚えているんだけど……人間の記憶ってダメだね（笑）。

——そのあたりは最近、私も他人事ではありません（笑）。古い話が続いて恐縮ですが、修士課程のときにはドイツ経済史の諸田實先生⁹⁾や柳澤治先生¹⁰⁾が非常勤講師で教えに来られていて、いろいろと学恩を受けたそうですね（老川 2015, 4頁）。

老川 そのころのドイツ経済史は非常勤でやっていて、大学院に入ったときに諸田先生、そのあとにいらしたのが柳澤先生でした。諸田先生の授業は、最初はドイツ語の勉強のつもりだったのですが、先生の生き方みたいなのところに共鳴しましたね。柳澤先生は兄貴分のような感じで、授業が終わると東武の屋上のピアガーデンに連れていってもらったりして……先生は学問の話ばかりしているんですけども（笑）。このお二人はコンスタントに研究を続けていて、いまでも本を出されているでしょう。いまなお、目指すべき人たちだと思っています。

——同じころ、日本経済史の大家である山口和雄先生¹¹⁾も非常勤でいらしていたというお話を以前うかがったことがあるのですが、よろしければそのときのことを……。

老川 あのとときは、山口先生がそんなに偉い先生だとはつゆ知らず……。たしか「経済史研究法」という科目を担当されていました。でも、授業の中身はというと、筑摩書店から出ている教科書シリーズの一冊で、山口先生が執筆された『日本経済史』っていう本があるでしょう。あれをダラダラ読んでいて、ちっとも面白くない（笑）。いい本かもしれないけど論争的ではないし、一緒に受講している院生たちも、いっそのこと古文書の読み方でも教えてもらったほうがタメになるなんて言い出しはじめて、それで、「老川、お前日本経済史だから交渉してこい」ということになってね。しょうがないから……というか自分もそう思っていたから（笑）、そのようなことを先生に話したら、「古文書はこれで勉強したまえ」とって柏書房かなんかから出ている読解の練習帳を紹介されて、その後も授業は変わりませんでした。それ以来、山口先生とはあまり話が出来なくなりましたね（笑）。まあ、若気の至りです。

9) 諸田實 (1928) 福島大学経済学部助教授を経て神奈川大学経済学部教授。専門はドイツ経済史。著書に『ドイツ初期資本主義研究』(有斐閣, 1967年) など。

10) 柳澤治 (1938) 東京都立大学経済学部教授などを経て明治大学政治経済学部教授。専門はドイツ経済史。著書に『ドイツ三月革命の研究』(岩波書店, 1974年) など。

11) 山口和雄 (1907 2000) 北海道大学経済学部教授を経て東京大学経済学部教授, 明治大学経営学部教授, 創価大学経営学部教授。専門は日本経済史。著書に『明治前期経済の分析』(東京大学出版会, 1956年), 『日本産業金融史研究』(編著, 全3巻, 東京大学出版会, 1966～74年) など。

——そのとき老川先生をそそのかした人たちも含まれるのかもしれませんが（笑）、修士論文をもとにしたデビュー作「両毛地方における鉄道建設」（老川 1974）が掲載された『立教経済学論叢』第8号の巻末には、1973年度の修士課程修了生一覧が修論のタイトルとともに出ています。のちに立教大学で同僚となられる服部正治先生¹²⁾、井上雅雄先生¹³⁾、熊谷重勝先生¹⁴⁾のお名前もみられますが、修了生はこの年度だけでも23名にのぼります。大学院経済学研究科も活発な時代だったのですね。

老川 いまからみればそうですね。修士課程の入試では、100人くらい受験していました。

4. 大学院博士課程と高校教員を兼ねていたころ（1974.4～1983.3）

——さきほどのお話ですと、法政大学大学院のゼミへ行かれたのは博士課程進学後ということでしょう。まず山本弘文先生のゼミですが、ずっと夜間開講だったのですか。

老川 そうでした。というのは、人文科学研究科の日本史専攻と相乗りになっていて、そこは教員とか学芸員をしながら学ぶ院生も多いので、夜に開講されていたんです。

——山本先生は『維新期の街道と輸送』を出版された直後だと思いますが、それなのにゼミで交通史が取り上げられることはなかったそうですね（老川 2013b, 2頁）。となると、ゼミではどのようなことをやっていたのですか。

老川 沖縄のことですね。山本先生は法政の沖縄文化研究所にもかかわられていて、久米島によく行かれていました。その報告などを含めて、沖縄や琉球のことをずいぶんやっていました。ゼミ中には先生と交通史の話があまりできなかったのも、そのあとの飲み会でやりました。

法政の人文科学研究科には林玲子先生¹⁵⁾も非常勤でいらして、山本ゼミに出ていた近世史の院生から、銚子でヒゲタ醤油を経営していた田中玄蕃家の文書調査に誘われました。2回くらい行ったかな。林先生たちが、ヤマサ醤油に入る前の調査でした。

——でも、その2回ぐらいの調査の成果で、このあと「明治中期銚子港における鉄道建設」（老川 1980）を書かれるわけですね。かなり効率的に史料を見つけられたのでしょうか。

老川 そうではなく、林先生のグループはその前から調査をやっていて、鉄道の史料があるから来ないかと言われて行ったんです。だからこのときは、すでに目録も出来ていて、鉄道の史

12) 服部正治（1949）立教大学経済学部教授。専門は経済学史、通商政策史。著書に『穀物法論争』（昭和堂、1991年）など。

13) 井上雅雄（1945）新潟大学経済学部教授などを経て立教大学経済学部教授。専門は労働経済論。著書に『日本の労働者自主管理』（東京大学出版会、1991年）など。

14) 熊谷重勝（1947）秋田短期大学商経科教授などを経て立教大学経済学部教授、常葉大学経営学部教授。専門は会計学。著書に『引当金会計の史的展開』（同文館出版、1993年）など。

15) 林玲子（1930-2013）流通経済大学経済学部教授。専門は日本経済史。著書に『江戸問屋仲間の研究 幕藩体制下の都市商業資本』（御茶の水書房、1967年）など。

料だけを見に行っただけという感じです。そのときは、林先生の馬力といいますか……夜遅くまで起きていて史料を筆写されているのは林先生で、朝いちばん早く起きてくるのも林先生だったのが印象的でした。

—山本先生と逆井先生は、東京大学の安藤良雄先生¹⁶⁾の門下生同士ですが、近藤先生と野田先生は、どのようなご関係にあったのですか。

老川 近藤先生と野田先生は当時、私学助成の教授会連合（国庫助成に関する全国私立大学教授会連合）の役員で、泊まり込みであちこちに行っては議論していて、そこで僕の話が出たということらしいです。

—野田先生のゼミには法政の院生がおらず、1対1の授業になりました（老川 2008a, 1～2頁）。こちらでは金融史や証券市場史ではなく、鉄道史の議論ができたのですね。

老川 中西健一の『日本私有鉄道史研究』を読み込んだりしていました。

—野田ゼミは、昼間の開講だったのですか。

老川 昼間です。博士課程のときには市立川口高校の専任になっていましたが、在学しなければならぬ3年間は大学院に行っていたということで、週に1日半の研修日がもらえました。それで、2年くらいは通ったと思います。その後は、鉄道史資料集の刊行などが始まりましてから、野田先生とはむしろ大学の外でお会いするようになりました。

—立教大学大学院のほうは、逆井先生のゼミに参加する程度でしょうか。

老川 そうですね。でも授業自体に通えたのはやはり3年間くらいです。その後も相談とかで、先生に会いには行きましたけど。

—前にお聞きしたマイクロフィルムの閲覧をめぐる^{もてぎ}茂木虎雄先生¹⁷⁾とのエピソードは、このころのことですか。

老川 そうそう。高校の勤務を終えてから立教の昔の図書館（新館）のマイクロリーダーのあるところへ行くと、いつも茂木先生がマイクロフィルムを見ているんですよ（笑）。

—東インド会社の帳簿ですね（笑）。

老川 それで僕の顔を見ると、「あ、君は時間がないんだから」と言って譲って下さって、それはもう、有り難くてうれしかったですね。そういえば大学に入学したとき、清里の立教キャンプというのがあって、そこで僕らのグループの担当だったのも茂木先生でした。

—そのような大学院生と高校教員の「二足のわらじ」を、忙しかったけれども充実していた時代と振り返られています（老川 2015, 5頁）、もう少しおうかがいさせてください。いまの高校とは違うのかもしれませんが、それでも普通に考えて、手のかかる生徒への対応だとか、

16) 安藤良雄 (1917-1985) 東京大学経済学部教授、成城大学経済学部教授。専門は現代日本経済史。著書に『太平洋戦争の経済史的研究』（東京大学出版会、1987年）など。

17) 茂木虎雄 (1926-2008) 明治大学経営学部助教授などを経て立教大学経済学部教授、大東文化大学経済学部教授。専門は会計史。著書に『近代会計成立史論』（未来社、1969年）など。

部活の顧問だとか、学校行事だとか、勤務時間外でも何かと時間を割かれたり、忙殺されたりすることはなかったのでしょうか。

老川 いまの大学のほうがよっぽど忙殺されているね(笑)。テニス部の顧問もやったけど、3時くらいに授業が終わってから6時くらいには上がるような感じだったし。

—そのころは私の高校時代とも重なるのですが、実際そうした「二足のわらじ」といいますか、在野の研究的な先生もいました。ただ、中学校あたりでは校内暴力などの問題が出てきて教員もその対応に追われたり、高校でも文部省や教育委員会による学校現場への締めつけが始まってきたりしたところではないかとも思います。教員として、そうした雰囲気の変化などはまだ感じられなかったのでしょうか。あるいは、このままでは「二足のわらじ」で研究を続けるのが難しくなりそうだという予兆のようなものはありませんでしたか。

老川 もちろん、大学の教員になりたいという気持ちもだんだん芽生えてきましたけど、そんなに強くはなかったですね。だから、このあと関東学園大学から採用の話があったときに、ちょっと迷ったのも事実です。公立高校の教員であれば、生活はそれなりに安定していますし。—十分な業績がありながら立教大学の経済学部助手に応募されなかったのも、そのあたりのお考えからですか。

老川 やっぱ3年の任期制でしたから、助手になろうという気はまったくなかったです。

話を戻すと、たしかに県立高校はだんだん締めつけが厳しくなっていたかもしれないけれど、僕がいたのは市立だったからワンクッションあって、まだ少しのんびりしていたんだと思います。でも、ずっと市立高校にいて年数が経ってくると、高校教員でいる以上そろそろ職場を移らなければならない。だったら、外へ出てしまおうかというようなことは考えていましたね。

—大学院生との「二足のわらじ」に加え、川口市史などの自治体史編纂事業にもかかわられるようになります。

老川 川口市史の場合は「職務専念義務免除」というのがあって、まあ簡単にいえば勤務時間中に市史編纂という兼業に従事してもよいということですね。だから手当ももらっていたし、原稿を書けば原稿料ももらっていました。そのとき一緒に市史編纂をやったのが金沢大学へ行く前の林宥一さん¹⁸⁾や鈴木秀幸さん¹⁹⁾です。古文書がちゃんと読めるのは、鈴木さんしかいなかった(笑)。埼玉県立文書館の館長に吉本富男さんという方がいて、文書館に県の行政文書を見に行ったりすると声をかけてきて、適当な人間をリクルートするんです。林さんも鈴木さんもそうなんですけれど。その吉本先生と市立川口高校の安達本政という校長先生が親しかっ

18) 林宥一(1947-1999) 金沢大学経済学部教授。専門は日本経済史、農民運動史。著書に『近代日本農民運動史論』(日本経済評論社、2000年)など。

19) 鈴木秀幸(1944-) 明治大学大学史資料センター調査役。専門は日本史、大学史。著書に『幕末維新期地域教育文化研究』(日本経済評論社、2010年)など。

たので、話がさっさと進みました。安達先生は観福寺（前川観音）というお寺の住職もされていました。

—川口だけでなく、埼玉県下のいろいろな自治体史に参加されるのも、同じように吉本館長からお声がかかったのでしょうか。

老川 ええ。最初に出た『埼玉の鉄道』（老川1982）という本も、吉本先生が突然書けとってきてね（笑）。

—一方、博士課程でいえば4年目にあたる1977年ごろから『社会経済史学』、『地方史研究』、『日本歴史』、『経営史学』など、査読付の学会誌にかなりのハイペースで論文を発表されます。

老川 当時はとくに査読論文がどうのというのはなかったので、載せてくれそうなところに投稿していたという感じです。『社会経済史学』は法政の山本弘文先生が編集委員をされていたので、原稿を見せると「じゃ、これあずかっていくから……」とか言ってね（笑）。

—投稿はどれもすぐに掲載が認められたのですか。書き直しとかは……。

老川 そういってなかつたですね（笑）。社経史は編集委員が読んで決めていたんじゃないかな。断られるというか、そういう人もいたのかもしれないけど、いまほど外部レフェリーを入れて厳格にというふうではなかつたと思います。この時期は、本当に山本先生にずいぶんお世話になりましたね。

—さきほど話に出た自治体史の原稿も含め、このころの論文はいずれも夕食後のわずかな時間や休日を使ってコツコツと書かれたということになるのでしょうか。

老川 そうですね。そのころは、昼間はもうとにかく何もできなかったですから。

—そうはいっても、お酒のお付き合いなどがあつたりしませんか（笑）。1975年5月にご結婚されてからは、家族サービスもしないわけにはいなくなるでしょうし……。

老川 たぶん僕が他人に自慢できるところがあるとすれば、付き合い酒だとかそういうのはいっさい断らずに（笑）、それでも勉強は続けていたというところですね。

それから、家族サービスも充分とは思わないけれど、春と夏の長期休暇には必ずどこかへ旅行に行っていたし、そんなに家族を顧みないで研究していたというふうには思っていないんですが……女房はどう思っているかわからないけれど（笑）。

—飲んで帰られたあとも、机に向かっていたのですか。

老川 多少はね。夜の10時ぐらいに帰れば、お風呂に入ったりなんかして11時ぐらいになっても、まあ1時間ぐらいはやろうかという感じでした。

—家で晩酌をされるようなことはなかつたのですか。

老川 人が来たりすれば別ですけど、家ではいっさい飲まなかつたかな。いまは缶ビール1本くらい飲みますけどね。だから、そのころの僕がとくに勤勉であつたわけではなくて、いまもまあ同じようだと思っています。

——博士課程を6年間過ごして満期退学されたあと、これらの論文などをまとめて1982年3月に経済学博士の学位を取得されます。学位の発行番号は第8号でした。立教大学の経済学博士は、1965年3月に取得された小林威雄先生²⁰⁾とさきほどお話の出た井上周八先生が最初で、イギリス経済史の鶴川馨先生²¹⁾が第3号(1967年3月)となりますが、その後も件数は少なく、いずれも立教の専任教員であったり、しかも少し年配の方だったりします。立教の大学院出身の若手に学位が授与されるのは、一つ前に第7号(1980年9月)で取得された田村信一先生²²⁾からでしょうか。

老川 そのころから博士号に対する考え方が少しずつ変わってきて、若手研究者に博士課程修了程度という意味合いで出すべきだという意見が経済学部の中で強くなってきたんですね。それで、最初に入ったのが田村さん、次が僕で、そのあとは道重(一郎)君²³⁾というように歴史系の博士号が続いていくんです。

——学位論文提出のきっかけは、逆井先生というよりも、夜間開講のゼミにずっと出続けていた法政の山本先生だったのですね(老川2015, 7頁)。

老川 回顧録にも書いたけど、ある日突然、ゼミの後の飲み会で先生から「老川君もだいぶ書きためているから、そろそろまとめてはどうか」って言われて。そういう気はまったくなかったんで、本当にびっくりしましたね。「逆井君には僕から話すから」とも言ってくれました。

——そういう経緯で、主査は逆井先生ですけれども、副査として鶴川先生ほか立教の先生方と一緒に山本先生も加わるわけですね。審査員ではありませんが、学位授与式の当日、住谷一彦先生²⁴⁾からもお言葉をいただいて非常に励みになったということですが……。

老川 住谷先生は、そのときどきにいろいろと声をかけてくれました。たとえば修士論文の審査のときにも「修士論文は活字にしときなさいよ」とか言われたんだけど、このときは「老川君、これを本にしなければ一生本は出せないからね(笑)」というような話をされましたね。

住谷先生とか小林昇先生²⁵⁾とかは、当時の経済学部のちょっとしたスターじゃないですか。

20) 小林威雄(1927-1993)立教大学経済学部教授。専門は貨幣論、金融論。著書に『貨幣論研究序説』(青木書店、1965年)など。

21) 鶴川馨(1931-)立教大学経済学部教授、立教女学院短期大学学長。専門はイギリス経済史、比較都市史。著書に『中世英国世俗領の研究』(未来社、1966年)など。

22) 田村信一(1948-)北星学園大学経済学部教授、同大学学長。専門は社会思想史。著書に『グスタフ・シュモラー研究』(御茶の水書房、1993年)など。

23) 道重一郎(1953-)敬和学園大学人文学部助教授などを経て東洋大学経済学部教授。専門はイギリス経済史。著書に『イギリス流通史研究 近代的商業経営の展開と国内市場の形成』(日本経済評論社、1989年)など。

24) 住谷一彦(1925-)立教大学経済学部教授、帝京大学文学部教授、東京国際大学教養学部教授。専門は社会思想史。著書に『共同体の史的構造論 比較経済社会学的試論』(有斐閣、1963年)など。

25) 小林昇(1916-2010)福島大学経済学部教授を経て立教大学経済学部教授、大東文化大学経済学部教授。専門は経済学史。著書に『小林昇経済学史著作集』(全11巻、未来社、1976-89年)など。

だから、そういう先生たちから声をかけられるとうれしかったですよ。

—小林昇先生とも、何かお話しされたことがあるのですか。

老川 とくに個人的にというものはないんですが、以前、大学院生と教授会との懇談会というのがあったでしょう。そこで小林先生が発する一言一言が、なんかもう身に沁みるような感じがしてね。たとえば、「研究っていうものは毎日やらなければならない。30分でも机に向かうんだ。僕はそうしている」とかね。そういう言葉が、すごく印象に残っています。

住谷先生からは、「アタマのいい人は物事をすぐに“わかっちゃう”から、研究者には向かない。アタマの悪い奴のほうが、ああじゃないこうじゃないっていういろいろ調べたりするから、そのほうが研究者に向いているんだ」って言われたこともありますね。

—それは一般論として……。

老川 もちろん、一般論として（笑）。僕がアタマ悪かったからとか、いくらなんでもそこまで言われるようなことはなかったと思うよ（笑）。

5. 関東学園大学および帝京大学在職のころ（1983.4～1991.3）

—関東学園大学へ移られるときのことや、赴任当初のことはすでに回顧録で詳しく書かれています（老川 2015, 7～8頁）。大学から採用に関する電話がきたとき、そのことを少しでも早く伝えたくて奥さまが帰りのバス停で先生を待っていたというくだりは、何かもう目にかかぶようです。感動のシーンをまぜ返すつもりはないのですが（笑）、奥さまは最初、関東学院大学だと思われていたとか……。

老川 そう。それで電話番号をみたらどうも群馬県の局番なので、おかしいなって（笑）。僕は高校で進路指導をやっていたから、地方の小さな大学の知識も多少あって、もしかしたら関東学園大学じゃないかなと思ったら、やはりそうでした。その当時、大学院を作ったのかな。それで学位を持っている人が欲しいっていうことでした。だから僕は若かったけど、行ってすぐに大学院の授業も持ったんですよ。

—赴任された当時は、難波田春夫学長²⁶⁾の時代ですね。

老川 難波田先生というのは、やっぱり立派な学長だと思いました。入学式や卒業式でされる話の格調が違いましたね。

—老川先生は非常勤講師とかを経験されずに大学の教壇に立たれたわけですが、講義の準備やゼミなどでの苦労はありましたか。

老川 学部の講義科目は日本経済史、産業史、交通論の3つだったかな。そんなに授業自体で

26) 難波田春夫（1906-1991）東京帝国大学経済学部助教授を経て東京都立商科短期大学商科教授、早稲田大学社会科学部教授、大東文化大学経済学部教授、関東学園大学学長など。専門は経済理論。著書に『難波田春夫著作集』（全10巻、早稲田大学出版部、1982～83年）など。

困ったということはなかったですね。ゼミだって、立教大学の最後のほうのゼミよりは、はるかに難しい本を読んでいましたよ（笑）。たとえば、石井寛治先生²⁷⁾の『日本経済史』とか、中村政則先生²⁸⁾の『労働者と農民』とかね。コンパで酒を飲んでも、学生と年齢が近かったせいかな面白かった。いまでも何人かとは付き合いがあります。

——赴任1年目の秋に、さきの学位論文が『明治期地方鉄道史研究』（老川1983）として出版されました。その少し前に野田先生たちが鉄道史資料集を刊行された日本経済評論社からです。老川 本のことは住谷先生からも言われていたので、資料集の会議が何かのあとの飲んだ席で編集者の谷口（京延）さんにちょっと話をしたのです。しばらくしてから「叢書にしてもいいですか」と連絡があったので、おカネの負担をしなくて済むなら何でもいいですって言いました（笑）。それで、「鉄道史叢書」として出すことになりました。

——出版から2年ぐらい後になってしまいますが、学部学生だった私もこの本が出たおかげで老川先生のお名前を知ることになります。最初は図書館で借りていたのですが、どうしても欲しくなったので、そのへんの本屋で買えるのかなと思ったらそうはいかなくて（笑）、最後は八重洲のブックセンターまで行ってようやく見つけました。

少し専門的な話になってしまいますが、いまあらためてこの本を読み直しますと、産業資本確立期における地方経済や地域的な市場の自立的展開の可能性が、「下からの道」といいますか地方鉄道の建設計画となって具体化する過程を描きながらも、そうした動きは「上からの道」的な明治政府の軍事的要請や、東京・横浜を中心とする中央集権的あるいは貿易主導型の対外従属的な国内市場形成の前に挫折を余儀なくされていくという歴史像が強調されているように思われます。地域レベルにまで視線を下げて多くの新しい史料や事実関係を掘り起こしながらも、結論としては従来からあるような講座派的史観をむしろ補強するような内容になっていますが……。

老川 そうですね。その通りです。

——そのような、歴史におけるもう一つの道の可能性とその限界というのは、近世史ですが逆井先生の石門心学研究や、立教の経済史では当時も依然として主流であった大塚史学の枠組みに大きく寄り添っているともいえそうです。そうした伝統的というか一昔前の理論の枠組みと、先生ご自身で新しく見つけられた史料から読み取れる時代像との間に、懸隔を感じたり、あるいはその狭間で葛藤したりするようなことはありませんでしたか。

老川 このときは、とにかく学位論文を本にして、自分では一仕事終わったなと思ってしまし

27) 石井寛治（1938）東京大学経済学部教授、東京経済大学経営学部教授。専門は日本経済史。著書に『日本蚕糸業史分析 日本産業革命序論』（東京大学出版会、1972年）など。

28) 中村政則（1935-2015）一橋大学経済学部教授。専門は日本経済史。著書に『近代日本地主制史研究 資本主義と地主制』（東京大学出版会、1979年）など。

たね。ところがそのあと、上山和雄さん²⁹⁾たちが研究会でこの本の合評会を開いてくれたんですが、行ってみたら僕が何気なく書いた文章や引用した史料をもとにして、こういうことではないかとか、ああいうことも言えるのではないかとか、本当に自由にいろんな角度から議論しているんです。著者を置き去りにして勝手に(笑)。

一枚モノの史料を見たりしたときに、これでどういことが言えるかとかやりあっているのを聴いていて、こういう世界があるのかとびっくりしましたね。歴史の研究っていうのはこんなふうにするのかと思いました。上山さんたちに批評してもらって、まだまだやらなきゃならないことがいっぱいあるという認識を持たされましたね。

よく「血肉化する」というけれど、このころまでは、あるシェーマがあってそれに史料をどうあてはめたらいいのかみたいな感じでやっていたから、研究といっても何か自分のものではないような気がしていたんですね。その後も、講座派というか大塚史学的なところ少しは残っていると思うんですが、史料そのものに注目することが大事だということを学んだ気がしています。だから、上山さんたちと出会わなければ、僕はそこで終わっていたと思います。——この研究会は、高村直助先生³⁰⁾やその門下生の方々が『日露戦後の日本経済』などの共同研究をまとめられていくのとはまた別の研究会ですか。

老川 別の研究会です。「明治期経済史研究会」といって、趣旨としては、当時われわれの世代は両大戦間期に研究の重点を移していつてしまっているけれども、明治期にもまだやり残していることがいっぱいあるんじゃないかといつて、主に明治期の経済史研究の文献を読んでいました。高村先生は出ていなくて、上山さんから「そのうち紹介するから」と言われたんだけど、なんか怖そうだったので、「べつに、いいです……」とか言ってしまった(笑)。だから、高村先生とお会いしたのは歴博(国立歴史民俗博物館)の展示を手伝ったときが初めてになります(老川 2015, 9頁)。

——実際に高村先生とお会いしてみて、いかがでしたか。

老川 ものすごく堅いイメージを受けていたのですが、会ってみたらお酒が大好きで、とても気さくに話をしていただきました。もちろん厳しい先生なのですが、資料的な裏づけがあって発言している限りにおいては話を聞いてくださるという感じですね。

——研究者としては別のグループになりますが、先ごろ亡くなられた藤田貞一郎先生³¹⁾との出会いもこのころになるのでしょうか。

29) 上山和雄(1946) 城西大学経済学部助教授を経て國學院大學文学部教授。専門は日本近現代史。著書に『北米における総合商社の活動 1896～1941年の三井物産』(日本経済評論社, 2005年)など。
30) 高村直助(1936) 横浜国立大学経済学部助教授を経て東京大学文学部教授、フェリス女学院大学国際交流学部教授。専門は日本経済史。著書に『日本紡績業史序説』(上・下, 塙書房, 1971年)など。
31) 藤田貞一郎(1935-2015) 松山商科大学講師を経て同志社大学商学部教授。専門は日本経済思想史、商業史。著書に『近世経済思想の研究 「国益」思想と幕藩体制』(吉川弘文館, 1966年)など。

老川 経営史学会が九州の西南学院大学で開かれたとき（1983年10月）、院生時代から親しくさせていただいている宇田正先生³²⁾から藤田先生と3人で「柳川へ行こう」って誘われて、そのときに一緒しました。宇田先生は、どうも最初から柳川行きを仕組んでいたらしいんですけどね（笑）。

藤田先生でやはり印象に残っているのは、例の「ハイマワル（這い廻る）実証主義」ですね。そういいながら、藤田先生は結構理論好きなのですが、ご自分の主張を史料で裏づけようというような姿勢です。史料そのもので組み立てるといふのはちょっと違うんですけど、そういう点は非常に見習うべきと思いました。先生のされている国益思想研究、大正期の中小財閥研究、そして市場史研究^{いちば}は問題関心が一貫しているということに気づいたことがあって、ああ、研究者というのはこういうふう^いに研究を発展させるのかと感銘を受けました。

少し後のことですが、藤田先生が『近代日本同業組合史論』を書かれたとき、「研究者っていうのは、書いた本が普段は読まれなくてもいいんだ。だけど、そのことを本当に研究しようと思った人に必ず参考にしてもらえるような、そういう本が書きたいんだ」というようなことを言われていましたね。僕は全然そうならないんだけど……むしろ最近、逆の方向に向かっているような気がする（笑）。

—ほかにもこの時代に先生は、鉄道史学会の設立にかかわられたり（老川 2013a, 10頁）、それとも関連しますが、野田正穂先生、原田勝正先生³³⁾、青木栄一先生³⁴⁾のいわゆる「鉄道三博士」との共編で『日本の鉄道 成立と展開』（野田ほか編 1986）という鉄道史の概説書を「鉄道史叢書」として出版されたりと、忙しく活動されています（老川 2015, 13頁）。

老川 『日本の鉄道』は僕が目次構成をつくって、それを野田先生たちに直してもらおうという感じでした。ただ、3人の先生が僕を編者に加えてくれたのは有り難かったですね。普通そういうのって、若い人にやらせておいて、あとがきか何かに「誰々君に世話になった」とかちょっとだけ書いて済ましちゃうケースが多いでしょう（笑）。

鉄道史学会のことで付け加えておきたいのは、原輝史先生³⁵⁾のことですね。鉄道史学会が設立された当初、結構国際化していたというか、海外の研究者を呼んだりしていましたよね。あ

32) 宇田正（1932 - ）追手門学院大学経済学部教授。専門は日本経済史、鉄道史。著書に『近代日本と鉄道史の展開』（日本経済評論社、1995年）など。老川先生と宇田先生との出会いやその後の交流については、老川 1992a, 283～286頁を参照されたい。

33) 原田勝正（1930 - 2008）日本国有鉄道総裁室修史課嘱託を経て和光大学経済学部教授。専門は日本近現代史、鉄道史。著書に『鉄道史研究試論』（日本経済評論社、1989年）など。

34) 青木栄一（1932 - ）都留文科大学文学部助教授などを経て東京学芸大学教育学部教授、駿河台大学文化情報学部教授。専門は交通地理学。著書に『日本の地方民鉄と地域社会』（編著、古今書院、2006年）など。

35) 原輝史（1943 - 2011）早稲田大学商学部教授。専門はフランス経済史、経営史。著書に『フランス資本主義 成立と展開』（日本経済評論社、1986年）など。

あいったことは、原先生が仕掛人でした。これはまったく個人的なことなんだけど、フランスのパリでTGVに乗ろうと思っていたら原先生とばったり会ったこともあってね。まだそのころ、海外に全然慣れていなかったから、原先生が切符を買ってくれたりしました(笑)。

— 関東学園大学で4年間を過ごしたあと、1987年4月から帝京大学へ移られます。ところで、この当時、先生が書かれた論文などの肩書には九州帝京短期大学³⁶⁾と書かれていたものもあったように記憶しているのですが、そのあたりのことはどうなっていたのですか。

老川 帝京大学が大牟田に短期大学を開学するという計画が進んでいて、「経営史」担当の教員が必要になっていたんです。そのへんの事情を知っている方が紹介してくれたんだけど、僕はとても九州まで行けないのでそれは無理だって言ったら、「いや、帝京大学経済学部での採用になるから九州には行かなくていい。夏に5日間だけ、大牟田の短大へ集中講義に行ってくれば」という話だったんだよね。それも完成年度までの2年間だけでいいと。それならということで、帝京へ移りました。肩書のことは、そんなこといったって文部省からもし何か言われたらいやだなって思って、むしろこっちが気を回して「九州帝京短期大学助教授」なんて書いたこともあるんですが、辞令は帝京大学経済学部となっています。

そういうわけで、帝京大学へ移ってからの最初の2年間は、九州に行かなければいけないこともあって、八王子キャンパスでの講義は1つか2つしかなかったですね。経済学部の教授会にも出なくていいし、学内業務もなにもない。だから結構よかったんです、この2年間は(笑)。

6. 母校・立教大学での24年間 (1991.4～2015.3)

— 帝京大学の3年目あたりで別の大学へ移られるお話もあったそうで(老川2015, 10頁)、もしそれが実現していたら先生にとっても立教大学にとってもその後の歴史が大きく変わっていたのではないかと思ったりもしますが、結局のところ、忙しい(笑)母校に戻ってこられました。といっても、私も覚えていますが、このころ助教授は大学院の担当がなかったんですね。

立教へ赴任された翌年の秋になりますが、研究書としては2冊目となる『産業革命期の地域交通と輸送』(老川1992b)を出版されます。先生が30代を過ぎられた関東学園大学や帝京大学時代の研究の集大成的な内容ですが、どのような思いでまとめられたのでしょうか。

老川 2冊目の本を出そうと思った直接のきっかけは、実は高橋昭三先生³⁷⁾なんです。立教では毎年秋口になると、昇格人事の有資格者紹介が教授会であるのですが、たとえば教授昇格の場合、講師何年、助教授何年という年数とか、学位を持っているかとかいくつか項目があって、

36) 1987年4月に福岡県大牟田市で開学した私立短期大学。1999年、帝京大学福岡短期大学に改組されるが2004年度をもって学生募集を停止し、06年に廃止された。

37) 高橋昭三(1928) 福島大学経済学部助教授を経て立教大学経済学部教授、作新学院大学経営学部教授。専門は経営財務論。著書に『経営財務論』(森山書店、1971年)など。

そのうちどれかをクリアしているというのが条件になっているんですね。僕は助教授になってからの年数ではまだ1年くらい足りなかったんだけど、高橋先生が「老川君も学位を持っているのだから、教授昇格を申請する資格があるのではないか」というようなことを言われたのです。それで、執行部が検討するという事になったのですが、結論としてはやはり年数が足りないから見送りということになりました。べつに教授になりたいというわけではなかったんだけど、教授会でああいうふうに発言して下さった高橋先生に申し訳ないなという気持ちもあったので、この際にといいますか……。昇格するときには本を審査してもらいたいとも思っていたので、ちょっと無理をしてみとめてみたという感じです。

——前著からまだ10年ほどしか経っていないのですが、目次構成をみてもわかるように、鉄道だけでなく河川舟運や道路輸送の分析、しかもそれらを鉄道開通による再編対象とみなすのではなく、それぞれの輸送手段の内実や相互関連に注目したり、のちの「物流史」研究につながるような特定地域における物産移出入の分析があったり、川口で鑄物業を営んだ永瀬庄吉のような地方企業家の存在に光を当てたり、煉瓦製造業を事例に産業発展と輸送の関係を明らかにしたり、そして営業報告書を駆使されての鉄道会社の財務分析など、その後における先生の問題関心の広がりやを反映した内容になっています。講座派的な結論で統一的にパッケージされていた前著と大きく異なり、まずは史料に即して考え、論旨を導き出していくようなスタイルの作品が増えました。

老川 山梨県とか群馬県の物産移出入なんかは、神立春樹先生³⁸⁾の論文を読んですごく面白いと思っていて、関東学園にいたから群馬でもやってみようかという感じで書いたんです。このあたりは神立先生の影響というか、まだお会いしたこともなかったのもノマネですよ。

その一方で、さっきも話したように上山さんたちの研究会に出るようになって、一緒にいた小風秀雅さん³⁹⁾、大豆生田稔さん⁴⁰⁾を含めた3人の議論に影響されました。史料を読み込みながら、自分なりのストーリーというか世界を作っていくんですね。書くものが多くなってきたというのも、ちょっとした史料を見たときに、これでどういうものが書けるかみたいな構想する力が、そのころからついてきたのかなという気はしますね。永瀬庄吉は、川口市史の調査で彼の小さな伝記が見つかったんですが、そういったものから、こういう論文が書けるんじゃないかと構想できるようになったのも、上山さんたちの研究会のおかげだと思います。

——そのようにしてきちんと新しい著書を出され、1993年4月、教授に昇格されました。それ

38) 神立春樹 (1934) 白梅学園短期大学助教授を経て岡山大学経済学部教授、二松学舎大学国際政治経済学部教授。専門は日本経済史、社会史。著書に『明治期農村織物業の展開』(東京大学出版会、1974年)、『産業革命期における地域編成』(御茶の水書房、1987年)など。

39) 小風秀雅 (1951) お茶の水女子大学文教育学部教授。専門は日本近代史。著書に『帝国主義下の日本海運 国際競争と対外自立』(山川出版社、1995年)など。

40) 大豆生田稔 (1954) 城西大学経済学部助教授を経て東洋大学文学部教授。専門は日本近代史。著書に『近代日本の食糧政策 対外依存米穀供給構造の変容』(ミネルヴァ書房、1993年)など。

から5年くらい経ってですが、大橋英五先生⁴¹⁾が経済学部から初めて立教大学総長に選出されたときには、総長補佐を務められます(1998~99年度)。

老川 立教に来てまだそんなに年数が経ってなくて、学内のこともよくわからなかったから、青天の霹靂というのが正直なところでしたね。仕組んでいた人がいたのかどうかはわかりませんが(笑)。あちこちでやっていた非常勤を断ったり、やりかけの仕事が中断されたり、ちょっと大変でしたけど、まあ仕方がないなと思ってやりました。僕に課せられたのは、主に大学院の改革、社会人大学院をつくることでした。もちろん、何人かで進めていくのですけれど。——かなりきついお仕事でしたか。

老川 きついというか、何ていうかな……やれば結構面白いんですよ。学校をつくり上げていくというか、組織を動かしているということは、ある種の充実感もあるじゃないですか。でも同時に、学会とか研究会からはどんどん遠ざかっていく。

だから僕は、このときも上山さんたちの研究会は休まないで出続けました。それが研究との唯一のつながりみたいな思いがあったので。上山さんたちとお酒も飲みたかったし(笑)。

——就任された年度の途中からは、立教学院史資料センターの初代センター長も兼ねられます。

老川 ええ。そのころ、立教大学出身の戦没者の碑を建てて欲しいという話がOBから出てきたのですが、戦没者だけでなく空襲で亡くなった人はどうするのかとか、日本人だけではなくて中国人や朝鮮人も立教にいたとか、いろんな議論が出ました。結局、立教学院の歴史をきちんと研究するところからやりましょうということで、大橋総長のもとで学院史資料センターがつくられ、お前がやれということになったのです。

——総長補佐を約2年務め上げたあと、2000年度に研究休暇をとられますが、休み明けの01年に、こんどは経済学部長(兼大学院経済学研究科委員長)に就任されます。『経済学部100年史』を参照してみますと、会計ファイナンス学科の開設、大学院の国際企業環境コース設置、課程博士号の取得推進などの改革がこのころ行われていますが……。

老川 新学科とかは前任者からの引継ぎですが、課程博士号の取得を推進しようというのは僕の提案です。ただ、いま反省するとすれば、規程が独り歩きしてしまっているようなところがありますね。論文のポイント制も、教員がもっと大学院生の課程博士号取得にコミットしていきましようというのが本来の趣旨だったのですけれども……。

——新しい12号館が出来て、経済学部の研究室が移転するのも先生が学部長のときですね。

老川 その手配も大変でしたよ。言い訳になるけど、僕の研究室が何であんなふうになっていたかという、学部長のときに研究室を引っ越さなければならなくて、ロクに片づけている暇がなかったんです。本や資料をただ放り込んでおいたら、そのまま定年まで来てしまった(笑)。

——研究に話を戻しますと、1990年代の後半あたりから、科学研究費補助金を受けた鉄道史の

41) 大橋英五(1942-) 神奈川大学経済学部助教授を経て立教大学経済学部教授、立教大学総長。専門は経営分析論。著書に『独占企業と減価償却』(大月書店、1985年)など。

共同研究が2つ続きます。明治期を対象とする最初のもは、野田先生を代表として『日本鉄道史の研究』（野田・老川編 2003）にまとめられ、後のものは老川先生が代表になられて『両大戦間期の都市交通と運輸』（老川編 2010）に結実しました。これらと並行して、『鉄道時報』（全9巻、八朔社、1997年）、『近代日本物流史資料』（全28巻、東京堂出版、1998年）、『戦間期都市交通史資料集』（全20巻、丸善、2003～04年）、『明治期私鉄営業報告書集成』（全32巻、日本経済評論社、2004～06年）などの資料復刻でも、先生はリーダーシップをとられました⁴²⁾。老川『日本鉄道史の研究』のころはまだ、鉄道史学会の草創期からいたメンバーに渡邊君、中村（尚史）君⁴³⁾などが若手が入ってきたという雰囲気だったけど……。

——『両大戦間期……』のときにはもう、私が上から2番目くらいになっていました。

老川 ああ、なるほど。世代交代が急速に進んだという感じですね。科研費は両方とも1000万円以上のお金をとって、全国あちこち調査旅行に行ったのが楽しかったですね。

——老川先生と旅行へ出かける回数が多すぎだと、私の妻は言っていました（笑）。

単著の刊行でも、2008年ごろから割とハイペースになってきて、『近代日本の鉄道構想』（老川 2008b）、『埼玉鉄道物語』（老川 2011）、『井上勝』（老川 2013c）、新書の『日本鉄道史 幕末・明治篇』（老川 2014）と続きます。もとなる既発表の論文もあるのですが、基本的には専門書というよりは教養書というか一般書の体裁をとっています。もちろん、企画する出版社側の意向もあったと思いますが、先生ご自身で何か思うところもあったのでしょうか。

老川 『近代日本の鉄道構想』あたりから、日本の鉄道史に対する自分の見方というか考え方が、井上勝の評価なども含めてだいぶ変わってきたというのがありますね。『埼玉鉄道物語』もその延長にあるんですけども、だいぶ前に書いた『埼玉の鉄道』をいつか書き直したいと思っていたところ、幸いなことに実現しました。『井上勝』は、なるべくこれまでの井上に対する評価から自由になって、自分なりに史料を集めて考えるとどうなるだろうかという感じで書いたつもりです。『文藝春秋』（2014年1月号）で、だいたい伝記というのは、この人間はこういうふうだと決めつけて書くのが多いけれどもこの本はそうではない。人は変わるんだという意味でこの本は画期的だというように紹介してもらって、多少はこちらの意図が伝わったのかなと思いました。

——^{とし}年齢をとってくと、渡邊君もあと10年ぐらい経つとそうなると思うんだけど、やはり通史的なものを書いてみたいという気持ちが起こってくるんだよね。原田先生とかいるんな方が通史を書かれているけれども、自分もちょっとやってみたいなど漠然と思っていたら、中央公論新社から新書の話が持ち込まれました。「新書程度にはなる」なんてよく言うけど、学術書と

42) 老川先生はこのような基本資料の復刻出版を、「もうひとつの研究活動」として重視されている。詳しくは老川 2005 を参照。

43) 中村尚史（1966 ）埼玉大学経済学部助教授を経て東京大学社会科学研究所教授。専門は日本経済史。著書に『日本鉄道業の形成 1869～1894年』（日本経済評論社、1998年）など。

は違う難しさがあって、編集者とのやりとりなんかもそういう意味では勉強になりましたね。——そのように、比較的大きな鉄道史の話がされるようになった最近のご研究を拝見しますと、原田先生が2008年に亡くなられてしまったことは、とても残念に思います。

老川 原田先生が亡くなられたということも、少し影響しているのかもしれませんがね。井上勝というのは原田先生の専売特許で、僕らが手を付ける余地はないと思っていたんだけど、亡くなられたことで少しはやってもいいのかなというような……。通史もそうですね。

実際、通史を書いてみて、原田先生の偉さを再認識しましたね。鉄道というのは要するにシステムであって、機関車が大きくなればレールも重くなるとか、高速になれば自動ブレーキが必要になるとか、すべてつながっているんです。そういう話を原田先生はきちんと理解されていました。ときどき、フツと趣味的な世界に入ってしまったりもするんですが(笑)。

——老川先生が立教に来られてからの大学院生教育といたしますか、研究者育成の側面を最後にお聞きしたいと思います。私もお手を煩わせたのですが、この間、博士の学位論文主査を7件も務められました⁴⁴⁾。近年は立教でも大学院生が少なくなってしまうとかがっているのですが、それでも老川先生のところには指導を受ける大学院生が最後まで絶えませんでしたね。老川 立教に24年間務めている間、大学院生がいなかったことはほぼなかったもので、それは有り難かったですね。でも、他大学からも院生が結構来てくれていて、彼らに鍛えてもらったという面もあったように思います。一人の力だけで研究者なんて育てられません。違う領域だったらなおさらですね。

——立教大学に限らず、研究者をめざす若い人へのメッセージのようなものがあるでしょうか。老川 要するに、「学問をやりたいのか、センセイになりたいのか」ということです。学問をやるということであれば、べつに大学の教員にならなくてもいいんです。これから大学も非常に厳しい状況になってくるから、もしかすると大学に来ないほうが学問ができるというふうになるかもしれない。大学を「職場」としてとらえるのか、それとも「学問をやる場」としてとらえるのかでは、ずいぶん違うと思います。

それでもやはり学問をやるということは楽しいことだから、いろんな人に目指してもらえたらいいなと思います。生活は何とかなる(笑)。「大学の先生になる」ということだけを目指していると狭き門になるかもしれないけれど、サラリーマンをやっていたって学問はやっていけると考えればいいんです。僕は高校の教員なんかやっていたものだから、「老川さんは若いと

44) 学位論文7件の内訳は、松野尾裕「山口卯吉と経済学協会 啓蒙時代の経済学」(1998年)、渡邊恵一「近代日本の産業発展と輸送 浅野セメントにおける原料調達問題」(2003年)、高宇「両大戦間期における水産物供給体制の変容 運輸・市場・企業」(2004年)、田村均「ファッションの社会経済史 在来織物業の技術革新と流行市場」(2005年)、小野浩「戦前・戦時期における東京住宅市場の研究」(2007年)、篠崎尚夫「東畑精一の経済思想 協同組合、企業者、そして地域」(2009年)、恩田睦「戦前期秩父鉄道の経営史的研究 近代日本の企業経営と経営者・株主」(2011年)である。

きに苦労した」ってよくいわれるのだけれど、とくに苦労したという自覚はあまりないですね。いまでも苦労しているし(笑)。

——一方で、指導にあたる立場にいるような人に対しても、何か一言ありますか。

老川 よく住谷先生が、「評論家になったらオシマイだ」というようなことを言われていました。つまり、評論される側になる。自分で書かっていうことですね。学者って、基本的にモノ書きだと思っんですよ。フリーの小説家だったら書かないと食えないから一生懸命書くけれど、大学の教員は書かなくても食えちゃうものだから、書くほうがおろそかになってしまう。

それと、教育も大事ですけども、やはり教育と研究とを峻別して、研究があつての教育というふうに位置づけていかないと、大学が終わってしまうのではないかと思います。大きくいえば、いまの文科省の大学政策が間違っているんですが、特定の大学だけが学問をやって、ほかの大学は働き手をつくれればいいなんてことでは、両方ともダメになってしまいますね。大学というのはやはり学問をやって、それで学生は実社会へと出ていく。そのことが力になる。大学で実学しか教えなくなったら、社会へ出て戦力になるような人材は育たないんじゃないかと思います。

おわりに

膨大な研究業績を遺され、学術面における受賞歴も多い老川先生のことを顕彰的に語ることはたやすいが、ここではむしろざっくばらんな対話の中から、先生のお人柄や研究に取り組む姿勢をごく自然なかたちで浮かび上がらせ、広く知っていただくを努めたつもりである。とはいえ、紙幅の制約などから割愛せざるを得なかった箇所も多く、インタビューでお名前が挙がっていないながら載せることができない方が出てしまったことを、まずお詫びしなければならぬ。また、さきの回顧録で先生ご自身が諸般の配慮からさし控えられた部分を不躰に質問し、あえてお話しいただいたようなことも少なくない。その意味でも、文責はあくまで筆者にあることをお断りしておきたい。

筆者が老川先生と初めてお会いしたのは、たしか1986年の3月ごろのことである。先生は大学の教員に転身されてまだまもない時期であり、菲才を顧みず大学院への進学を考えていた筆者に、それこそ高校の進路指導教員のような笑顔で接していただいたが、その口調はこの世界が生易しいものではないことを諭すようでもあった(これは鈍感な筆者の勘違いで、先生はもっと直截的に進学を思いとどませようとしていたのかもしれない)。当時は「老川君」とか「老川さん」と呼ぶ人も多く、筆者のように「先生」とお呼びしていたのは少数派であった。

時は流れて2015年2月21日、「鉄道史の可能性」と題して老川先生の立教大学における最終講義が開かれた。今回のお話にも登場する「山小屋」が並んでいたあたりに建てられた高層棟の新しい教室は、老川先生を「先生」と慕う学生、卒業生、研究者で満席となった。あれから

30年近い歳月が経過していることにあらためて気づかされ、しばし感慨にふけた。

2015年4月より老川先生は、跡見学園女子大学観光コミュニティ学部の教授として教壇に立たれている。思いもよらぬことであったようだが、副学長という要職にも就任された。立教においても、学院史編纂の委員長を引き続き務められている。これまでも増して多忙な毎日をご過ごされているご様子であるが、そのような中でも先生は、ずっと昔からされてきたように、わずかな時間をやりくりしながら次のご著書の原稿や新しい研究テーマと向き合われている。どうか今後ともご健康に留意され、お変わりなくご活躍されることを祈念しつつ結びとしたい。

文献一覧

- 内田義彦 (1960) 『明治経済思想史におけるブルジョア合理主義』, 有沢広巳・東畑精一・中山伊知郎編 『経済主体性講座』第7巻, 中央公論社, 83~116頁。
- 老川慶喜 (1974) 『両毛地方における鉄道建設 「北関東市場圏」形成の問題として』, 『立教経済学論叢』第8号, 233~266頁。
- (1980) 『明治中期銚子港における鉄道建設 総武鉄道成立過程の一問題』, 『経営史学』第15巻第2号, 84~103頁 (のちに老川1983, 第4章に収録)。
- (1982) 『埼玉の鉄道』埼玉新聞社。
- (1983) 『明治期地方鉄道史研究 地方鉄道の展開と市場形成』日本経済評論社。
- (1992a) 『京都鉄道会社の設立と京都財界』, 『追手門経済論集』第27巻第1号, 253~286頁。
- (1992b) 『産業革命期の地域交通と輸送』日本経済評論社。
- (2005) 『もうひとつの研究活動』, 『PS JOURNAL』第6号, [頁付なし]。
- (2008a) 『野田正穂先生の思い出』, 『評論』第167号, 1~3頁。
- (2008b) 『近代日本の鉄道構想』日本経済評論社。
- (2011) 『埼玉鉄道物語 鉄道・地域・経済』日本経済評論社。
- (2013a) 『『鉄道史学』30号に寄せて』, 『評論』第190号, 10~11頁。
- (2013b) 『山本弘文先生の思い出』, 『評論』第191号, 1~3頁。
- (2013c) 『井上勝 職掌は唯クロカネの道作に候』ミネルヴァ書房。
- (2014) 『日本鉄道史 幕末・明治篇 蒸気車模型から鉄道国有化まで』中公新書。
- (2015) 『思い出すままに 私の研究遍歴』, 『立教経済学論叢』第80号, 1~16頁。
- 老川慶喜編 (2010) 『両大戦間期の都市交通と運輸』日本経済評論社。
- 野田正穂・老川慶喜編 (2003) 『日本鉄道史の研究 政策・経営/金融・地域社会』八朔社。
- 野田正穂・原田勝正・青木栄一・老川慶喜編 (1986) 『日本の鉄道 成立と展開』日本経済評論社。
- 立教大学経済学部編纂委員会編 (2008) 『立教大学経済学部100年史』立教大学経済学部。